

令和七年度

第四十一回 青少年の主張矢祭大会

作文集

矢祭町青少年育成町民会議



## 開催趣旨

矢祭町は、「元気な子どもの声が聞こえるまちづくり」を基本理念に掲げ、行政、議会、町民がそれぞれの役割を果たしながら、独立独歩のまちづくりを進めていくことを誓っています。恵まれた自然環境の中で、夢を持って子育て・子育てが出来る風土こそが矢祭町の誇りであります。

青少年の主張大会は、矢祭町の未来を担う子供たちが、自分たちの抱える未来への想いを発表する場です。その強い想いを、行政、議会、町民がそれぞれ真摯に受け止め、これらからのまちづくりに対する責任を再確認する場でもあります。

未来を担う子どもたちの成長を見守りながら、これからの矢祭町に思いを馳せる、そんな場になって欲しいと願っています。



## 【目次】

## 第四十一回青少年の主張矢祭大会

「小学生の部」

### ◎最優秀賞

☆みんなのために考える

矢祭小学校六年 吉岡 輝  
・ ・ ・ 4

### ○優秀賞

☆バレーが教えてくれた大切なこと

矢祭小学校五年 石井 颯馬  
・ ・ ・ 6

☆変わる自分

矢祭小学校五年 高澤 桃  
・ ・ ・ 9

☆やさしい心が創るぼくたちの未来

矢祭小学校六年 小野瀬 弘人  
・ ・ ・ 11

「中学生の部」

◎最優秀賞

☆目標を持つ

矢祭中学校三年 鈴木 亜海・ ・ ・ 14

○優秀賞

☆選択の意味

矢祭中学校一年 寺島 颯希・ ・ ・ 17

☆努力

矢祭中学校二年 本田 瑛士・ ・ ・ 19

「高校生の部」

◎最優秀賞

☆綴り人

福島県立白河高等学校一年 深谷 凛  
・  
・  
・  
22

○優秀賞

☆勇 気

学校法人石川高等学校一年 寺島 幸希  
・  
・  
・  
25

☆高校の学びから社会へ

福島県立修明高等学校一年 鈴木 彩華  
・  
・  
・  
28



## 最優秀賞

みんなのために考える

矢祭小学校

六年 吉岡 輝

「フレー。フレー。白組。」

ぼくは、今年の運動会で白組の応援団長を務めました。応援団長をやろうと思った最初の理由は、ただ自分が応援精一杯大きな声で練習からがんばりました。運動会当日は、紅組も白組もみんな心を一つに応援をしました。ぼくが応援団長をやった白組が勝ったときは、とてもうれしかったです。

運動会を通してぼくは気づいたことがありました。

それは、最初は「自分がやりたい」と思っていた気持ち

ちが、いつの間にか「白組のためにやるぞ」という気持ちに変わっていたことです。自分のためにと思っていたことがいつの間にかみんなのためにやってみようと思うようになったのです。そうすると、嬉しさや、やる気が何倍にも感じられるようになりました。

今までのぼくは、自分もやってみたいから、先生がやっていたゴミ集めを手伝ったり、自分がやりたいから校庭の草むしりをしたりしていました。

「輝くんありがとう。助かったよ。」

と先生方に言われるたびに、

「ほめられるのは嬉しいけど、やりたいからやってるだけなんだけどなあ」と心のなかでずっと思っていました。だから逆に先生から、

「輝くん、これ配ってくれる？」

と言われるときは、

「え。なんで俺に言うんですか？」

と思い返しながらか、仕方なくやるときもありました。

自分がやろうと思ったわけではなかったからです。

そして、「やりたいからやる」だけで行動すると、みんなに迷惑をかけているときも多くありました。周りのことを考えていないからです。

しかし、六年生になり、運動会で気持ちが変わ化したことをきっかけに、「自分のためだけではなく、みんなのためにやろう」と考えるようになりました。そう考えられようになると、やって良かったなという達成感をさらに感じられるようになりました。

「自分のため」と「誰かのため」が合わさって、自分からやりたいと思うことも多くなりました。先生が配りものをしているとき、ぼくは、

「先生、それ配りますか？」

と自分から言えるようになりました。ぼくがやっているのを見て、友達も一緒にやるようになりました。

「みんな、ありがとう。」

と言われると、ぼくは今までよりとてもうれしくなり

ます。ちょっと照れくさい感じもありますが、「やってよかった。またほかのこともやってみよう。」と自分から行動することが増えてきました。

ぼくはこれからも、やりたいと思ったら、どんどん取り組みでいきたいと思います。

「自分のため」、そして「みんなのため」に。







## 優秀賞

バレーが教えてくれた

大切なこと

矢祭小学校

五年 石井 颯馬

バレーボールです。

スポーツ少年団に入ってから一年が経ちました。バレーボールを始めたきっかけは、テレビで日本代表の試合を見てとてもかっこよくて、ぼくのあこがれとなり、やってみたいと思うようになったからです。

そこで、バレーボールの体験に行きました。初めてボールを受けたときは、固くて痛かったです。しかし、それ以上に、ボールをパスしてつなぐことが楽しいと感じました。この体験がきっかけとなり、チームに入

団しました。

試合に出してもらえるように一生懸命に練習をしました。初めて出場した試合では、サーブをするときにあまりに緊張して、ボールがネットにかかってしまいました。それが悔しくて泣いてしまいました。そんなときでも、チームの仲間が励ましてくれて、うれしかったです。その日からもつとがんばろうと思い、家でも練習をするようになりました。家ではお父さんやお母さんとパスやレシーブ、サーブの練習をしました。入らなかったサーブが入るようになるとバレーがますます楽しくなりました。

習い始めて数ヶ月が経ち、それまで、ベンチでの応援が中心でしたが、少しずつ試合に出してもらえるようになりました。早くチームの勝利にこうけんでできるようになりたいという思いが強くなっていました。

六年生が引退し、新人チームのメンバーに入り、本格的に試合に出てプレーするようになりました。その



ため、今までのようなプレーではだめだと感じ、より一層、練習に力を入れるようになりました。チームから退団してしまうメンバーもいましたが、その後に新しいメンバーも加わり、仲間とともにたくさん練習しました。

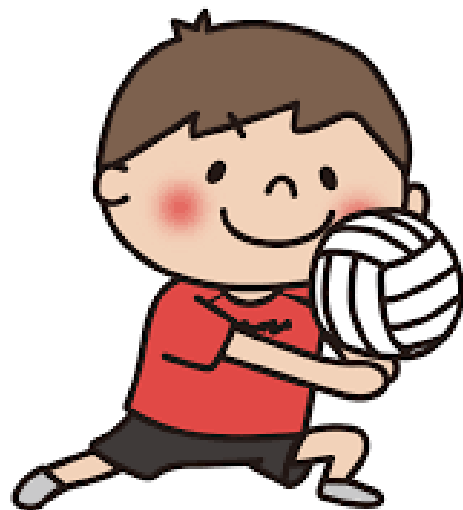
その結果、県南大会で優勝することができました。大会で優勝してみんなで写真を撮ったり大きなトロフィーを持って重さを感じたりして、優勝したことを実感できたとき、今までに感じたことのないうれしさがこみあげてきました。

県大会では、一試合目で負けてしまいました。一、二セット目のどちらもありードしてただけに、とても悔しかったです。来年も必ず県大会に出場できるように練習に励みます。そして、一回戦を突破することが今の目標です。そのためにレシーブやジャンプフロッターサーブをさらに入れられるように日々の練習に取り組んでいきたいです。

小学生はローテーションがないため、ぼくはレシーバーとして相手のスパイクやサーブなどをカットしています。スパイクが強いときにセッターに的確に返せないことがあるので、どんなにむずかしいボールでも、セッターがトスをあげやすいようにレシーブすることがぼくの課題です。また、六人で行うスポーツなので、勝つためには協力することが必要不可欠です。声を出すことがとても大切ですが、いざとなると、プレーすることに精一杯で声を出し忘れてしまうのも課題です。どんなときでも、ボールが自分のコートに来たときに、チームメイトの名前を呼んで誰がボールをカットするのか、大きな声で伝えたいです。ぼくの通っている矢祭小学校では、「がんばる心」というキーワードがあります。

よく校長先生が全校生の前でお話をしてくださいます。ぼくは、授業の中で分からない問題があるとすぐにあきらめてしまうことがありました。また、自分の

やりたいことを優先してしまい、辛いことから目をそらしてしまうこともありました。しかし、バレーボールを通して、すぐにあきらめないようになりました。できないことはできるようになるまでがんばる負けず嫌いが身に付いてきました。この「がんばる心」をこれからも大事にして、最高のバレーボール選手になりたいです。





## 優秀賞

変わる自分

矢祭小学校

五年 高澤 桃

皆さんは自分に自信をもてて  
いますか。わたしは、自分に自  
信があります。しかし、少し前の自  
分はそうではありませんでした。

これまでのわたしは、あいさつをするのが苦手でした。誰かにあいさつをしようと思っても、なぜだか恥ずかしくてできませんでした。声をかけようと思っても、声が出なくなってしまうのです。今思えば、こんな簡単な事が恥ずかしいなんて、自分は情けないと感じています。あいさつをしただけで嫌われる人なんて、そうそういませんよね。

あいさつだけではありません。他にも、すぐ人の顔色をうかがってしまうことがありました。そのときは嫌われたくないという気持ちでいっぱいでした。特に、一番悩んだことは言い返せなかったことです。三年生のころに、悪口を言われたことがありました。強い言葉が言われたら、自分の中で何かが欠けたような胸の痛みがありました。それなのに、言い返したい気持ちよりも、「言い返してもっと嫌われたらどうしよう。」という気持ちの方が強く、なかなか言い返せませんでした。そんな自分に、とても悔しくて腹が立ちました。いつもそんなモヤモヤな気持ちで、ストレスもたまりました。家で泣いたこともありました。そんな自信のない自分が嫌いでした。

だからこそ、自分を少しでも変えるために努力をすることになりました。そのために、わたしは目標を立てることから始めました。母からもアドバイスをもらいました。そして、最初から大きい目標ではなく小さな

目標から決めました。例えば「今日は先生に大きな声で挨拶をする」や「今日は誰かを遊びに誘ってみる」などを考え、やってみることにしました。でも、怖くてできなかった日もありました。できなかったときは、もう一度目標を見直して、できそうなことを少しずつやりました。勇気を出してもう一度、もう一度と自分の足で前に進んで挑戦しました。

それが続けていくうちに、勇気と自信がついてきたような気がしました。いつからか、嫌いだった自分のことも、とても大好きになりました。できなかったことも、今ではたくさんできます。友達に自分から挨拶をすることや、気にしすぎないこと、そして運動もできるようになりました。人の顔色をうかがわないことで、自分に自信をもてるようになったから、色々なことに挑戦できたのだと思います。

今の目標は、活発に話せるようになることです。この青年の主張に立候補したのも、この理由からです。

この青少年の主張は、わたしにとって、大きな挑戦です。

この経験をもとに、また目標を立てて、友達と活発に活動できるように努力していきます。今後、努力をしても失敗することがあると思います。それでも、諦めず何度でも挑戦して、最後まで自分の目標を達成させたいです。自分のことを大好きでいられるように、これからも失敗や周りをおそれずに、自分なりの目標に向かって自分の足で前に進んでいこうと思います。





## 優秀賞

やさしい心が創る

ぼくたちの未来

矢祭小学校

六年 小野瀬 弘人

困っているとき、誰かに声をかけられると嬉しいですよ

ね。それは「相手が勇気を出して声をかけてくれた」と感じるからではないでしょうか。ぼくは、困っている人を見かけたら、自分から声をかけることを大切にして、毎日を過ごしています。

ぼくは、昔はあまり話すことが得意ではありませんでした。友だちに自分から話しかけに行くのは苦手で、みんなの輪の中に入るのも難しいときもありました。でも、困っているときに声をかけてもらおうと心があ

たかくなる経験をし、ぼくはそこから変わりました。思いやりの意味を知ったのです。

ぼくは思いやりとは、誰かのやさしさの中で育つものだと思います。

困っているなと気づいても、行動を起こさなければ思いやりの気持ちは届きません。相手に届く形で行動を起こして初めて、相手に思いやりの心が届きます。

ぼくの困っている人を助けたいという気持ちも、その気づきから生まれました。

郡山や白河に出かけたとき、車いすや杖をついている人が困っている場面を見かけました。でも、周りの人はそれに気づかず、道をふさいでしまうこともありました。

そのとき、ぼくは「声をかけて助けたい」と思いましたが、行動に移すことはできませんでした。頭でわかっていても、行動に移すのはとても難しいと思いました。あの経験は悔しい気持ちとして、今も心に残っ

ています。

だからこそ、次に同じような場面に出会ったら、勇気を出して絶対に声をかけようと思っています。

担任の先生は、友だちとの関わり方や、どうすれば居心地のよいクラスになるかを毎日話してくださいます。その話や学校での経験も、ぼくを少しずつ成長させてくれています。

毎週木曜日のお昼に、スマイルタイムという活動があります。これはぼくに自信をつけてくれた活動です。この時間には、普段あまり話さない人とも交流できる時間がたくさんあります。最初は緊張しますが、進んで話をしてみるとみんな笑顔で楽しく活動できるようになっていきます。

そうすると休み時間にも、自分から友だちに声をかけられるようになりました。スマイルタイムの経験を通して、友達との関わり方を変えることができました。その他にも、授業での発表や行事の司会などにも挑戦

できるようになってきました。

こうしてできないかもしれないと思っていたことも挑戦できるようになった自分に、少しずつ自信がついてきています。

ぼくの住むこの矢祭町は、地域の人々のやさしさであふれています。お祭りやふれあい駅伝、地域の行事では、子どもも大人も関係なく、みんなが笑顔で参加しています。ぼくはそんな町に住んでいることがとても誇らしく思っています。大好きな矢祭町のために、ぼくはその一員として、自分の行動で思いやりの輪を広げていきたいと考えました。

困っている人に声をかけることは、自分にとって小さな一歩かもしれませんが、周りの人の笑顔をつくり、また別の誰かを励ます力になると信じています。思いやりは、連鎖して広がっていくからです。

学校でも、町でも、日常の中でその輪をつなぐ人に

なりたいたとぼくは思っています。

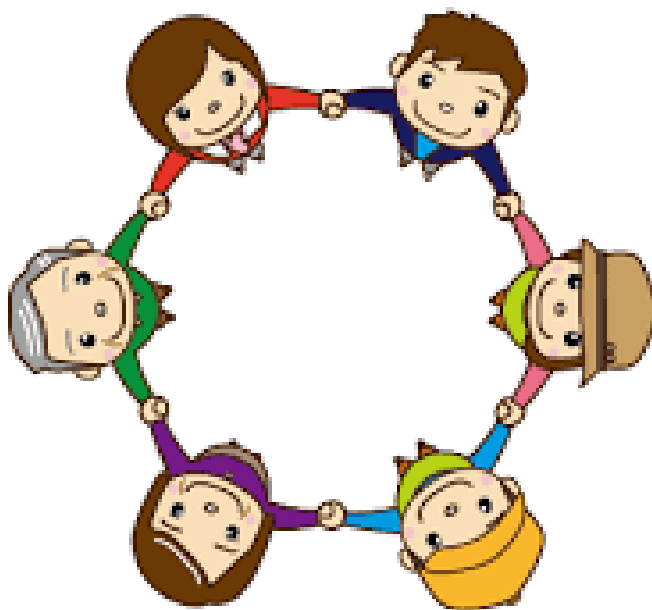
だから、ぼくは自分から困っている人に声をかけたいと思っています。

これから先、いろいろな人に出会い、いろいろな出来事があると思います。ぼくが一步を踏み出すことで、教室も学校も、町も世界も、もっと笑顔であふれる場所になると信じています。小さな一歩かもしれませんが、優しさの輪を広げるために自分から行動を起こし、勇気をもって手を差しのべる人になりたいです。

今日、ここで、ぼくは宣言します。

ぼくは矢祭町をやさしさと笑顔あふれる町にします。そして自分の行動で、みんなが安心できる場所をつくりていきたいです。

思いやりの力は人と人をつなぎ、未来を変えていきます。ぼくはその力を信じてこれからも一歩ずつ自分の足で、しっかりと歩んでいきます。







## 最優秀賞

目標を持つ

矢祭中学校

三年 鈴木 亜海

担任の先生から、今回の主張の話をいただいた時に私は、「やります。」と即答しました。

これまでの私は、こんな風に人前に立って話すことが苦手でした。つつい周囲の目を気にしてしまい、失敗したらどうしようと一人で考え、行動できない人間でした。小学校の頃の私は、吃音のような癖があつて、授業の発表すらしませんでした。幼かった私たちは、吃音への理解もなく、自分の話し方をからかわれたこともありました。母は、クラスが変わるたびに、学校へ私の話し方の癖について話に行

つてくれていたようです。そのことが申し訳なく感じ、ますます人前で話すことが嫌いになりました。また、家族に学校の話をする機会も減っていききました。

人と話さなくなると段々と人間関係も狭くなってきました。矢祭町は、小・中学校が一つしかなく、クラス替えても大きな変化がありません。私は、仲の良い友達とだけ話すようになりました。いつも話している友達とならなぜか言葉に詰まらないからです。

そんな私の生活に転機が訪れたのは中学二年生の時です。クラス替えて、仲の良かった友達と離れてしまいました。新しいクラスでは、休み時間に誰と一緒に過ごせばいいのだろう。急に話しかけたら、変に思われるかな。と、そんな風に考え廊下に出ては話せる友達を探しました。また、なぜ私は、これほどまでに周りのことを気にしてしまうのか悩みました。今思うと、あの頃の私は、自信がなかったのだと思います。周囲に合わせるだけで、自分の意志が弱かったのだと感じ

ます。きっと同じように悩んでいる人も多いのではないのでしょうか。自信をもつためにはどうしたら良いのでしょうか。

私は、目標をもつことが自信につながると 생각합니다。目標をもつことで、仮にその目標が達成できても、できなくても、自分の自信につながるということを経験したからです。

私のクラスは、行事などの際に細かく目標を設定し、目標達成のためにあらゆる手段をみんなで作ります。もちろん、私が意見を求められることもあります。はじめは、自分が意見を言っているのか不安もありました。しかし、実際に話してみると、みんなは、自分の意見を否定せず受け入れてくれました。同じ目標を持つ人同士で会話をする、こんなにもコミュニケーションが楽なのだと感じました。

また、私のクラスには、部長を務めている友だちがたくさんいます。どの部活動も、より上位の大会やよ

り高い成績を残すために、努力していました。また、部活動の枠を超えて声を掛け合ったり、応援し合ったりすることで、今まで話したこともなかったクラスメイトとも関わりをもつようになりました。友だちと話をする中で、もっと体力や技術を磨きたいという気持ちになり、他競技にも積極的に挑戦しました。

みんなと同じ目標を共有して、行動したりするようになる、私の不安は和らいだように感じます。この頃から、自分の意見を伝えることに怖さを感じなくなっていました。また、話し方の癖も治ってきたように感じます。

私は、担任の先生にメンタルが強い人や自信に溢れる人たちが私とどんなところが異なるのか相談したことがあります。先生は、「自信がないからやめておく」という考え方は、正しいように思えるが、この考え方では挑戦することを先延ばしにしてしまうと話していました。実際には、何か行動を起こしてみることによ

って自信が生まれるのだそうです。「何か行動を起こす」  
ために必要だったものが私にとっては、「目標」だった  
のです。

それから私は、目標をもって様々なものに挑戦する  
ようになりました。時には失敗してしまうこともあり  
ますが、周囲の人の力を借りながら、成長できている  
ように感じます。今も言葉に詰まることはありませんが、  
気にもしません。

私はまもなく、義務教育を終えます。矢祭町には高  
校がないため、他の地域の学校に進学することになり  
ます。きっと新たな環境でも、中学校で学んだことを  
生かして楽しく充実した学校生活を送れるのではない  
かと楽しみです。

高校生活最初の目標は、「周囲の人に話しかける。」  
にしてみようと思います。





## 優秀賞

### 選択の意味

矢祭中学校

一年 寺島 颯希

人は生きていく中で、実に多くの場面で、目の前の事柄について選択することを強いられます。

そして選択肢の中には、自分だけでなく他人にも影響を与えるものもあります。

僕も中学生になり、自分が入る部活動や委員会を決めるときなど、選択する場面が増えたと感じています。これらの経験から、選択続きの人生でよい方向に向かうためにすべきことは何か考えました。僕が思い至ったのは「選ぶ根拠を明確にすること」と「選んだあとの未来を考えること」、そして「学ぶこと」です。

「選ぶ根拠を明確にする」とは「自分の選択と向き合い、なぜそれにしたのかなどの理由をはっきりさせる」ということです。「根拠がはっきりしない」、つまり、自分の目標を忘れ、てきとうな選択を繰り返していくと、自分の目標から逸れた結果につながってしまいます。

「自分はこういうことをしたい」「そのためにはこういうことが必要だ」「そのためにはこういう選択をしていかなければならない」と考えることが大切だと思います。

僕は課題を終わらせて楽になりたいと頭では分かっているのにそこでできとうな選択をして大変になったことがあります。

なぜそこでそのような選択をしてしまったのかは「面倒だから、ゆっくりしていたいから」などの理由でした。ですが、もう中学生なので、そんなことをやっていては周りに置いていかれます。ですので、今は

「早く終わらせたい」という気持ちを心がけています。

また、「選んだ未来を考える」とは「自分がその選択をしてその後によどのような未来になるのかを一度考える」ということです。自分の未来は今の選択によって作られます。すなわち、一つ一つの選択の度にどのような未来につながるかを想像し、自分の理想に近づける選択を積み重ねることで、理想の未来に近づくのです。その選択をした時に一度止まって、「後悔しないか」「それは安全なのか」などを考える時間をとってから考え直してみるというのも大切です。

私たちは、私たちの人生を生きています。その人生で選択するのはもちろん私たちです。しかし、初めての選択肢で何を選べばよいかは最初はわかりません。それならばどうすればよいのでしょうか？わからないから周りから学べば良いのです。みなさんも経験はありませんか？自分では分からない時に周りの人達に情報を聞いてより良い選択を選べば、自分の人生が良い

方向に向く可能性があると思います。

国語や数学の勉強とは異なり、「生き方」や「人生の選択」は簡単にはわかりません。多くの人とふれあい、観察し、教わり、真似をしていく中でだんだんと「自分の選択」ができるようになるのです。

私も、皆さんも、選択しなければならない場合がこれから何度もあると思います。その一つの選択で人生が大きく変わるかもしれません。その選択が自分の人生を良い方向に導くのかは選択してみないとわからないのかもしれない。

しかし、だからこそ、考えて選択することをくり返すことで、悔いのない人生を送れるかもしれません。私はこれからの人生、自分の選択に後悔しないように、「根拠をもって選べるよう」「未来を見据えて選べるよう」「周りに学んで自信をもてるよう」常に「選択すること」の大切さを意識しながら生活していきたいと思っています。



## 優秀賞

努力

矢祭中学校

二年 本田 瑛士

僕の目標は中体連で東北大会に出場した兄を超えることです。その目標を達成するために兄という高い壁と向き合いつながりながら努力をしてきました。しかし、今の時点では兄を超えることはできていません。

さて、みなさんは努力はしたが兄に追いつけていない僕を見て、僕の努力に意味はあった、つまり、努力は成功に繋がったと思いますか？意外に思うかもしれませんが、僕は成功に繋がったと思います。なぜなら、成功を求めて努力を続けた僕は、成功には至っていま

せんが、成功に着実に近づいているからです。そう思う理由が二つあります。

一つ目の理由は努力の質の違いです。先ほど「努力」と言いましたが、努力とは「成功を求める」と「成長を求める」ものの二つに分かれています。「成功を求める」は一つのこと的成功することだけを考えながらそのみにがむしゃらに取り組むということです。一方で「成長を求める」とは何か一つだけではなくいろいろなことが成長することを目指して努力することです。

僕は努力をする上で「成功を求めること」より「成長を求めること」の方が良いと思います。なぜなら僕も勉強や部活で成功を求めて努力をしていた時期がありました。しかし、その時は勉強と部活どちらも成功することはできませんでした。そこから僕は、成功ではなく、出来なかったことを一つでも多くできるように、成長することを求めて勉強や部活に取り組みまし



た。その結果、勉強では点数が上がり、部活ではタイムが縮み、成長が成功に繋がったのです。兄もそうでした。兄は何事も成功するのではなく成長していくことが大切だと言っていました。だから僕は努力はただ成功を求めてがむしゃらにするのではなく一つ一つの過程で成長することを求めて努力するほうが良いと思います。

二つ目の理由は、技術や能力の向上以外に精神が成長することです。努力で苦手なことを克服することができます。ですがそれはすごく辛いことです。そのため努力から逃げ出したくなる時があります。そこで諦めたり逃げ出すのも一つの手ですが僕はそこで諦めず、がんばって踏ん張ることが大切だと思います。例えば、僕は昔理科がものすごく嫌いでした。でも僕はそこで諦めず頑張っていました。逃げたくなった時でもいいあります。でも僕は絶対に逃げ出さないという気持ちで頑張り続け

ました。その結果、今僕は理科がものすごく好きになつてできるようになりました。また、兄も苦手な競技も諦めずに練習をしていました。その結果、兄の苦手だった競技が好きになり、どんどん結果を出していきしました。このように努力を諦めなくなったり、努力から逃げ出したくなったらすぐに諦めたり逃げたりするのではなく、頑張つて踏ん張っていくことで、精神が成長していくとおもいます。

また、努力する過程で、「努力するときの危険性」にも気が付きました。努力をしているとき、どうしても周りの人と比べてしまいます。そして「自分は周りの人より努力しているのに成長していない。」「いくらやっても結果が出せない。」と考えて、努力をやめてしまいたくなるのです。ですがそんなことで焦ったり、落ち込んだりする必要はないのです。努力とは自分のペースでコツコツ続けるもので、周りとの差ができて当たり前なのです。「どれだけ周りとの差がついても自分は自



分。」「他人は他人。」という考えで小さな達成感を大切にしながら、自分のペースで努力していくことで乗り越えていけるのです。

これらのことから、僕は努力をするときは成功を求めるのではなく、「成長を求めて努力すること」「努力することから諦めたり、逃げ出したりしなくなった時は頑張っただけで努力を続けていくこと」「努力をするときは周りに流されず、自分のペースでコツコツと努力をしていくこと」が大切だと学びました。

僕は中学生である今は、努力した分だけ成長し、成功につながる時期だと思います。だから、僕はこれまでの努力を信じ、今以上に成功を目指していきます。そして、高い壁である兄を必ず超えてみせます。みなさんどうか僕を応援してください。





## 最優秀賞

綴り人

福島県立

白河高等学校

一年 深谷 凜

私は将来、「言葉」について研究したいと考えています。

それも特に、人の心に響き、心を動かす言葉。その原理を調査し、私も実際に人の心を動かせる言葉たちを活用して、誰かを笑顔にさせたり誰かに感動を与えたりしたいと思っています。そして、「綴り人」になりたい。それが私の今の一番の夢です。そんな私の夢への話をこの場を借りて話したいと思います。

『日本人であることが罪になる』

これは、とある本の帯に書いてある言葉です。ちなみに紹介すると、小手鞠るいさんの『星ちりばめたる旗』という本のものです。

さて、ではみなさん、先ほどの言葉を聞いて、どう感じましたか。どんな内容なんだろう、そんな気持ちがよぎりませんでしたか。少しでも興味を惹かれませんでしたか。

最近では、本を買う時に「帯買い」というようなワードが登場しています。そんなとき、私は疑問を覚えるのです。

本にはよく、キャッチコピーのような言葉が書いてある帯がついていますが、なぜそれにより人はその作品を読んでみたいと思うのでしょうか。本文を読んだわけでもない、それなのになぜ引きつけられるのか。

また、今私は、本での例を挙げましたが、他に映画などではどうでしょう。予告やポスターを見て、心惹かれることは無いでしょうか。

『言葉こそが人の心の最大の原動力である』

これは私の持論です。

言葉というものは触ることはできないけれど、確実にその人個人から生み出されたものであり、視覚化も聴覚化もできる。そして、個人の気持ちや考えがよく表れるものであり、なおかつ発信された言葉によって誰かの心が動かされるという、言葉を発した本人だけで収束するものではない、必ず人と人との間に生まれるものといえるということ。これがこの持論を挙げる私なりの考えです。

みなさん、例えば耳が不自由な方、病気などの症状で声が出せない方など、自分の意思で発音することが難しい方は言葉が使えない、そう思っていますか。いいえ、そんなことはありません。全てとは言えませんが、それは、先程あった視覚化、聴覚化などを用いて解決ができると考えています。言葉は誰でも使うことができますのです。だからこそ様々なツールとして遠

い昔から現代まで消えることなく使われてきたのではないのでしょうか。置かれた状況が違う人とも、今隣にいない人とも、または時代を超えてすら人と人とを繋ぎ、誰かの心を動かし続けている。そう考えるからこそ、私は先程のような問いかけをしました。あくまでこれは私の持論にすぎませんが、こう考えることで「言葉」という身近すぎるものが神秘的なもののように思えてくるのです。

私は、幼い頃から人のためになる仕事がしたいと思っていました。ですが、歳を重ね自分自身と向き合うことで、直接的に人を救ったりする仕事は自分には向いていないとを感じるようになりました。そんなとき、自分は何ができるだろう、何をしたいのだろう、そう自身に問いかけ続けました。ある時私は気づいたので、自分の心がたくさん動いたのはどんな時だろう、それは私にとって「言葉」に触れた時だ、と。本の記事に背中を押されたり、映画のセリフに感動したり、曲

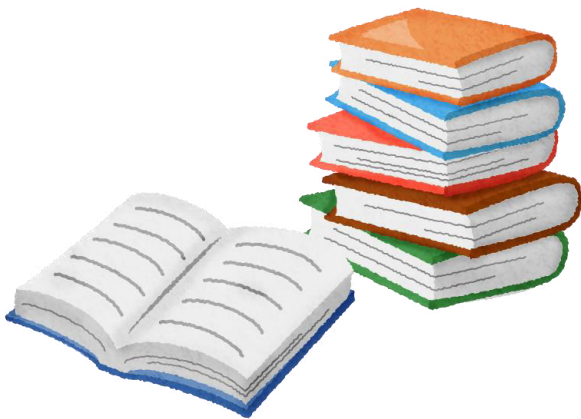
の歌詞に美しさを感じたり。そして、自分自身でそんな言葉を紡いでみたいとも同時に考えました。これが私のしたいこと。自分がそうであったように「言葉」がもつ人の心を動かす力で、誰かを励ましたり、時には寄り添ったりしたいのです。

私は初めに言った帯買いをすることも、映画の予告やポスターをみてその作品を見たくなることもよくあります。それだけでなく読んだ後、見た後にそれらを見てさらに感動を覚えることも少なくありません。それは、私がそんな「言葉」というものが好きだからです。

人に押しつけるものではなく、聞いてもらえて、見てもらえて、その人の心に触れられる、そんな言葉を紡いでみたい。そしていつか、そんな私だけの、私の「言葉」を誰かの心に綴れる人になりたい。だから私は「言葉」の研究がしたい。

「綴る」それは日記のように大事な思いを書き留め

ておくこと。また、繋ぎ合わせておくこと。そのように、人と人を、人とものを大切に繋ぎ合わせ、誰かの心にそっと落とし込む。このような素敵な役を担う人たちを、私は「綴り人」と呼びたい。なくても生きていけるけれど、ないとももの寂しい。すべての人とは言えなくとも、”誰か”にとって大事にしたいと思えるものを、言葉で創る。そんな仕事にいつか携わり、誰かの綴り人になりたいです。





## 優秀賞

勇 気

学校法人石川高等学校

三年 寺島 幸希

突然ですが、みなさんの日々の生活の中でいじめという言葉を何度か耳にしたことはありませんか？

いじめは、私たちの生活の中で最も深刻な問題です。学校生活で例えると、教室での会話の中で、軽はずみに誰かを傷つける言葉を発したりする場面が見受けられます。また、陰口や仲間はずれなどの行為が何度も繰り返されると被害者の心には大きな傷が残り、日々の生活にも支障がでてしまいます。いじめは個人の問題ではなく、その場の雰囲気や環境、そして一人一人

の行動が積み重なって生まれる現象です。そのような社会を変えるには、個人の心がけだけでなく、学校、家庭、地域が協力して、全体としての対策を作る必要があると思います。

私は、この十五年間生きてきた中で何度かいじめについて考える事がありました。いじめが怖くて不登校になってしまおうという生徒を今でも何度か耳にしたこともあります。ある日、私のクラスメイトの子が身体的にも精神的にも深く傷ついていたいじめがありました。私はその子がとても苦しんでいるのを知っていたながら周りの目が怖くて先生方に相談できませんでした。後日、その子が学校に来なくなってから私があの時伝えればこのような事態にはならなかったかもしれないとても後悔しました。この事から、いじめを解決するには、被害者と加害者だけでなく、傍観者である私たちの行動する勇気が求められていると感じました。ですが、いじめを発見しても、他人事だと思ったり、怖

くて行動に出せない人が多いのではないのでしょうか。ですが、私たち一人一人がいじめを見て見ぬふりをしないことが解決への第一歩です。まずは行動を恐れないことが大切です。普段から小さなことでも挑戦を積み重ねることで、いじめに直面しても、怖さに負けず信頼できる人に話せるかもしれません。また、報告だけでなくも被害者に寄り添える方法があります。もしも仲間はずれになっている子がいたら手を差し伸べて居場所を作ってあげるだけでもその子は安心できると思います。しかし、傍観者であってもたった一つの行動で加害者となってしまうかもしれません。その言葉を使って誰かを傷つけないか一度立ち止まって考える勇氣も必要です。

さらに、このような問題を解決するには、学校側や家庭側でもいくつか対策する必要があると考えます。一つ目は、「相談のしやすさ」です。被害者、加害者、傍観者、誰もが安心して相談できる雰囲気と、秘密が

必ず守られる体制にすることが特に重要です。二つ目は、「いじめに関する教育を強化する」ということです。スクールカウンセラーの活用だけでなく、いじめをテーマにした授業を行い、いじめについて深く理解し、生徒同士で意見を共有することも問題解決に近づくと思います。また、「有効的な対応」も大切です。被害を早期発見し、加害者への適切な指導、被害者への支援と生徒がまた学校へ来れるための支援などの様々な対応が必要です。これらを実現するには学校側だけでなく、家庭と地域社会の協力が必要不可欠だと思います。家庭では、コミュニケーションを通じて子供の心の状態を知る努力が必要です。地域社会では、学校関係者や家庭と連携し、いじめ問題についての情報共有の機会を設けることが重要とされています。

つまり、私が伝えたいことは、「私たち一人一人の責任ある行動」と「学校、家庭、地域の協力」がいじめをなくすために必要なことだということです。私たちは

今から自分の身近な場所でちょっとした変化を起こし、それを積み重ねることによって問題解決に近づくべきです。また、いじめを見たときは勇気を出して声をかけ、被害者を支え、人を傷つけない自分になる。この積み重ねが、いじめをなくす第一歩になると思います。私たちの勇気のある一歩で、いじめを、なくしませんか。







## 優秀賞

高校の学びから

社会へ

福島県立

修明高等学校

一年 鈴木 彩華

私はこの四月に修明高校

の食品科学科に入学しまし

た。食品科学科とは農業科の中でも、特に食品の製造や加工について勉強をする学科です。

現在は、座学を通じて知識を、実習を通じて技術を学んでいます。

入学して初めて、実際にとうもろこしや枝豆といった作物を作ったり、ジャムやパウンドケーキなどの製造をしたりしました。作物を作ったり、食品を製造し

たりするのは簡単だと思っていましたが、意外に難しく、てこずった場面も多々ありました。特にてこずったのは、充填という作業です。充填とはパウンドケーキの生地を型にいれることをいいます。少しでも手元が狂って生地をたらししてしまうと、商品にならないからです。

また、作物づくりでは土おこしや土の性質によって肥料を変えたりすることが難しかったです。先生やクラスメイトに教わりながら頑張りました。実習で作った商品は校内で生徒や先生に販売しています。さらに、作ったジャムや、サンピスという乳酸菌飲料を高校の近くに住む方に販売するという実習にも参加しました。入学して半年の間に、食品科学科で学んだことは二つあります。一つ目は、一つ一つの作業を丁寧にするこの大切さです。実習に入る前に服装や爪を整えることや、入念に手を洗うことは必須です。また、不備や他の商品との差ができてしまうと、印象が悪くなっ

てしまったり、買った人が不快な思いをしたりしてしまいます。さらに、丁寧によらないことにより、異物混入など品質の安定性がなくなってしまう可能性もあります。そのようなことを防ぐためにも、丁寧にやることは大切だと学びました。

二つ目は、礼儀です。笑顔で話すことや言葉遣いに気をつけないと、買う人を不快な気持ちにさせてしまうかもしれません。どんなに商品が良かったとしても、売り手の印象が悪いと買っただけなので、礼儀・笑顔作り・言葉遣いに気をつけています。

では、食品科学科での学びは、私が社会に出て生きていくうえでどのように役立つのでしょうか。これを考えるために、この半年で学んだことと、社会で必要なことに共通点があるか、考えてみました。私がこの半年で学んだことと社会で必要なことには、多くの共通点があると思います。特に、私が現在目指している「看護師」という職業にも通じることがたくさんあり

ます。

まず、一つ一つの作業を丁寧に行うことの大切さについてです。食品製造の作業では、少しのミスが品質のばらつきや衛生面の問題など、「食の安全」につながります。看護の仕事でも同じように、確認や作業のわずかな違いが患者さんの安全に関わってしまうことがあります。そのため、食品科学科で学んだ「丁寧さ」や「正確さを意識する姿勢」は、看護師として働くうえでもとても大切な力になると思います。

また、販売の経験で学んだ「礼儀」や「笑顔で接すること」も、看護師という仕事に通じています。看護師の仕事には、医療従事者として患者さんの世話をすることや医師のサポートをすることだけでなく、患者さんやご家族の精神的なケアも含まれます。患者さんやその家族の方々に安心してもらうためには、言葉遣いや態度がとても重要です。相手の気持ちに寄り添い、誠実に接することの大切さを、私は販売の経験を通し

て実感しました。

これから多くの知識を得つつ、さまざまな商品を製造したり、開発したりする予定です。今は高校生として、将来は看護師として社会の一員となり、人にもモノにも誠実に向き合う人になるためにも、修明高校でしっかりと学んでいきたいです。



## 編集後記

皆様には大変お世話になり、心より感謝申し上げます。おかげ様で多くの方々にご来場いただき、盛会のうちに終了することができました。今後とも変わらぬご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和七年十二月 発行

発行者 矢祭町青少年育成町民会議

事務局 矢祭町教育委員会教育課

